

痕跡学序説 — 痕跡を読み、痕跡に語らせる —

Introduction to Traceology — What the traces tell us —

- 小松研治／富山大学芸術文化学部、小郷直言／大阪大学大学院経済学研究科、林良平／大阪大学大学院経済学研究科
KOMATSU Kenji / The Faculty of Art and Design, University of Toyama, KOGO Naokoto / Graduate School of Economics, Osaka University, HAYASHI Ryohei / Graduate School of Economics, Osaka University
- key Words : Skill, Trace, Traceology, Work environment, Design, Tools

要旨

われわれの身の回りには、傷や手垢の堆積、道具の摩耗、そして散乱した書類等の痕跡がさまざまな場所に残されている。痕跡自体は、何らかの力のかかり具合や勢い、行為の向きなどの情報をたくさん持っている。しかし、発見した痕跡から、それがそこに残された理由や行為の軌跡の謎を知りたいと思わなければ、これらの痕跡は清掃や整頓によって人知れず消え去ってしまうだろう。痕跡は、人に気づかれなくともそこにあり続けるが、残された理由を知りたい者に対しては、価値ある情報となって立ち現れ、多くを語りかけてくるに違いない。さらに言えば、気づかないうちに身体が誘導されたり、反対に不備を察知して身体が躊躇したりする場合にも、そこに残された痕跡には、幸福感や戸惑いを読み取ることができる。よって、痕跡から人々の環境や道具の改善への手がかりを得ることができるかもしれない。また、制作方法や技能を痕跡の形で意図的に語らせれば、人は痕跡から情報を読み、自然な作業過程に導かれていくことになるのではないだろうか。

1. はじめに

多くの人は幼いころ「人を外見で判断してはいけない」^{*1}と教わったことがあるのではないだろうか。しかし、教えに反することはわかっていても、外見で判断することはやめられない。体形や容姿、服装に装飾品、そして持ち物から、その人に関するたくさんの情報を意図的に、あるいは意図せずに取り取ってしまう。「人を外見で判断してはいけない」という教えの裏にある論は、人の内面の大切さを強調することにある。道徳であれ、宗教であれ、多くの社会文化的常識は、人間の内面を強調する傾向がある。内面、とくに「こころ」が外に立ち現れることへの畏敬を喚起し、社会の安寧を計る思いがあったに違いない。

ところで、今から取り組もうとしている課題は「人を内面(だけ)で判断してはいけない」という論旨を主張する。つまり、人を「行動の結果」から考察してみようとするアプローチである。もう少し具体的に言えば、人が行動した結果としてしばしば残す痕跡に注目し、その痕跡ができる

理由を探ろうとする試みである。このアプローチは突き詰めれば、痕跡から「こころ」まで読み解こうとする大胆なものかもしれない。痕跡とは、過日に何かがあったことを示す跡であるが、その多くは意図されずに残される。いわば、人の行動から生み出された副産物といえる。ただし、その副産物から多くの情報を読み取ることができる。

痕跡を利用して情報を得ようとする試みは、必ずしも新しいものではない。犯罪捜査や歴史・考古学などの例を挙げるまでもなく、多くの学問分野で痕跡は貴重な情報源としての役割を果たしている。^{*2} 痕跡を見つければ議論を発展させる礎となるし、在るに違いないと思った痕跡がないことが、新たな発見の手がかりとなることもある。痕跡から必要な情報を得る方法論は、犯罪捜査や歴史・考古学などでは卓越した独自の科学的発展を遂げているため、ここで改めて我々が解説する余地は少ないと思われる。しかし、これらの分野にとって痕跡とは、犯人捜しや考古学的事実を知るためのものであって、痕跡そのものに関心があるわけではない。しかも、その痕跡が「繰り返された人間の行為」や「無意識的な行為」を暗示していることを必ずしも必須事項としているわけではない。我々がこれから取り組む痕跡学にとっては、この点は大きな関心の的となる。

もし人が付けた痕跡が見つければ、痕跡と人とはお互いに切り離せない関係にあるようにみえるであろう。ただし、すでにある痕跡が人を誘い、その痕跡をさらに痕跡らしくするということが十分にありうることである。これを「痕跡に誘導される」という表現で言い表すことにしよう。この場合、痕跡と人、どちらが独立変数で、どちらが従属変数であるか一概には決めかねる。痕跡と人とはお互いに影響を与えあっているのだから、両変数はお互いに関連し合っているとも考えられる。

こうした、皮膚の外側のもので人の行為を説明しようとする立場は、「行動主義」とか「環境主義」と呼ばれることがある。これは相対する皮膚の内側で説明しようとする「内在主義」「精神主義」と呼ばれる立場との対比でつけられたカテゴリーの一つである。^{*3} 一見すると痕跡学は、

「行動主義」的立場をとるように思われるかもしれないが、痕跡学は決してどちらか一方の立場をとるものではないことを明記しておきたい。むしろ、こうした二元論的な論争を乗り越えて、新たな地平で人間の行為を説明する学問を標榜している。それはさておき、まずは身近な例を用いて痕跡発見の旅から始めることにしよう。

2. 痕跡発見

痕跡は身のまわりにあふれている。どこにでもあるのだ。立ち上がって、トイレまで行き、帰って来るまでに、いくつ痕跡を見つけられるだろうか。スイッチ周りの手あか、階段の変色、壁の疵、コップに輪を描く茶渋…。ものにつく痕跡は、見ているだけで自然と人々の行動が思い浮かぶ。からだにつく痕跡もある。古傷やペンダコ、口のまわりの食べかす、虫歯、玉ねぎの皮をむいた後には手に独特のにおいが残る。トレーニングを積んだ運動選手の体形はそうでない一般人とは一見して違う。からだにつく痕跡からは、その人の習慣や日頃の活動が見えてくる。

痕跡はどこにでもある。しかし、見つけやすい場所と見つけにくい場所があるようだ。毎日使っている洗面所や風呂、台所などは身近な痕跡の宝庫だ。一方で、新築の家で痕跡を探すのは骨が折れる。せいぜい見つかって、大工の仕損じた仕事の痕跡ぐらいだろう。繰り返し歩かれる道、繰り返し差し込まれる鍵穴、繰り返し同じ人が訪れる受け付け、繰り返し打たれるキーボード…。同じ行動が繰り返される場所は痕跡を見つけやすいようだ。痕跡はどこにでもある。そして見つけやすい場所もある。しかし、気をつけないと見過ごしてしまう。何の痕跡を探すかという課題が明確ならば、探しに行く場所は自ずと決まってくる。しかし、予想できる痕跡をわざわざ探しに行くのでは手間がかかるわりに面白味に欠ける。むしろ、予想外の痕跡を発見した時にこそ、好奇心を掻き立てられるものだ。ただし見まわしただけでは、見えてこない痕跡もある。痕跡を発見するためには、実際に現場で探すのが良策だ。歩いてきた道を振り返り、手をかけたドアノブの周りを見つめ、めくった本の裁断面を俯瞰し、食事の後には姿見で全身を確認してもらいたい。行動の後を振り返れば自ずと痕跡はみつかるかもしれない。

このように痕跡はどこにでもあるが自己主張するわけではない。痕跡はほとんど気づかれずに「ただそこにある」だけである。私たちは日常生活の中でわざわざ痕跡探しに熱中する暇はない。「なぜそのような痕跡が残されたのか？」という疑問と好奇心を持って近づき、その意味を痕跡に問うた時、ようやく価値ある情報が怖ず怖ずとあらわれ出てくるものである。痕跡に導きのきっかけを見いだしたり、痕跡に何かの手がかりを探したり、痕跡に意味を問いかけたりした人にだけ、そっとその訳を明かしてくれる。

しかも清掃だけが目的なら、単なる汚れとして痕跡はいとも簡単に消し去られてしまうかもしれない。なぜそこに傷や手垢が付いたのか疑問を持ったとき、初めて傷や手垢の張本人たちの行動が思い浮かべられるようになる。もっとも、痕跡を忌み嫌うデザイナーたちは、汚れがつかない素材や摩耗しない素材を活用して、いつまでも造ったときの清廉さを保とうとするかもしれないが、彼らにとって痕跡は単なる汚れとしか映らないために、デザインの改良や改善、さらには新しいデザインの芽を自ら摘み取ってしまうことにもなりかねない。

下記の写真(1, 2)は、あるガソリン給油所で見つけた痕跡を撮ったものである。



写真1,2 エアーガンのノズルが差し込まれている様子

たまたまガソリンの給油の間に、車の灰皿にたまった屑を捨てようとゴミ箱に近づいた時、そのゴミ箱のそばにエアーガンが用意されていた。これを使って灰皿の中の細かなゴミを吹き飛ばした後、このエアーガンを元に戻そうとした。するとタオルを置いていた木製の棚の、脚部側面に開けられた穴に黒い汚れがしっかりとついているのが見え、この汚れがふと気になってしまった。

この脚部の穴は、棚の高さを変更する時に、棚板を止める金属のフックを差し込むために、ある間隔で開けられたものである。この棚は、もちろんエアーガンのノズルを差し込む目的で置かれたものではない。たまたまこの穴の持っている情報「ここに差し込めるよ」に誘導された結果、

スタンドのスタッフの誰かが最初に差し込んだのだろうか、だがこれは推測の域をでない。しかし、これを繰り返すうちに、汚れがついて「ここに差し込めるよ」という案内（顕在化した情報）になりだしたに違いない。この痕跡情報は、他のスタッフや利用客に同じ行動を誘発・誘導し、ますます顕著な繰り返しによる汚れ（痕跡）として明白な差し込み口のサインになっていったと思われる。

こうした自然にできた痕跡の利用を見ると、多少の不便さがありながらも、適度な合理性を兼ね備えているという特徴を見いだすことができる。ものと人の行為との適度な調和を実現するために痕跡が利用できる場面があるのではないか。これが痕跡学を提唱しようとした最初の動機である。

3. 痕跡探しとその物語

3.1 痕跡探し

カメラを持って研究室から飛び出すと、そこは痕跡の宝庫である。歴史のある古い建物や、とても整備されているとは呼べない大学のキャンパスはなおさらである。新しい建物やよく整備された環境では、痕跡を探するのはほぼ不可能に近い。なぜならそこにはまだ人々の行為が数多く、繰り返されている兆候が目に見える形で現出していないからである。行為の繰り返しが積み重なって現れている跡は、注意深さを持った目には誰にでも飛び込んでくるはずである。その瞬間にシャッターを押せば、痕跡の記録の一丁あがりである。とは言うものの事はそうスムーズに運ぶわけではない。痕跡に注意するとは具体的にどのような態度であろうか、すぐに難問が待ち受ける。注意深くというが、どのような準備態勢をとればいいのかであろうか。そこでまず、痕跡探しの方法論をいくつか伝授することから始めよう。

1) 足跡から始める跡探し

まず「跡」という字を手がかりにしてみよう。跡は何かが行われ、また存在したことの「印 mark」である。人や車の通った跡には少しずつではあるが「あと」が着いていく。一人や数台でははっきり出てこないものの、その数量が膨大になりおまけに年数が経てばその跡は誰の目にもはっきり確認できる模様や傷、しみなどの跡となるだろう。そこで階段や道路・廊下などは格好の発見場所となる。特に興味深いのは、廊下のコーナーであるとか、人が通行のため何気なく触れてしまいそうなものには、なぜこんな風に跡が着くのであろうかと、問いかけたくなるような跡が発見できる。1) そうしたときには、その跡を写真に撮るだけではなく、ズームアウトして跡の周りの風景も同時に撮影しておくことが大切である。持ち帰って分析するときに重要な手がかりとなるかもしれないからである。以

下順を追って写真とともに解説してみよう。

写真3は、東京ミッドタウンに開設した某美術館での展示を鑑賞したあと、最寄の地下鉄方向に行こうとした時に撮影したものである。直角に曲がった歩道の内側に敷き詰められた芝が、わずかに傷んでいる様子が分かる。ほんの少しでも近道をしたという歩行者の心理からであろうか。

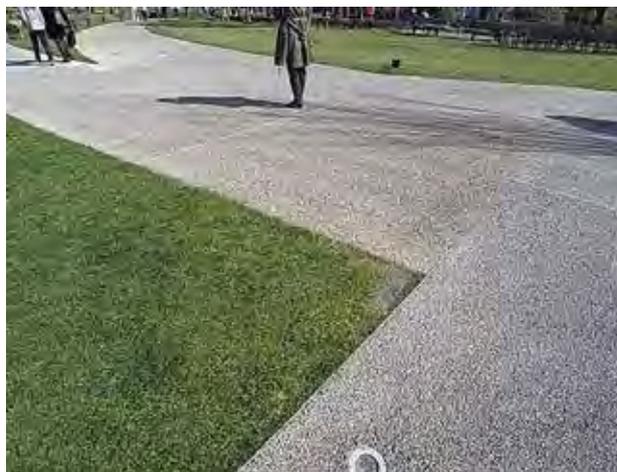


写真3 傷み始めた角の芝の様子

ただし、単に跡であれば何でもよいというわけにはいかないケースも多い。汚れや傷はぬぐい去さられ補修される運命をもつものも多い。また、蚊に刺された跡、歯の跡、遺跡などをここでの主題である痕跡とすることには躊躇せざるを得ない。どこで線引きをするかは、4章以降での議論で明らかとなっていくはずである。さらに重要なことは、単なる跡収集に熱中する姿勢では、跡を価値あるものとして利用することはできない。2) 発想の糸口にしようという態度が重要であることについては第5章で詳しく述べる。

2) 作業(行為)の痕探し

「痕」の方とはというと、「きずあと」とか「物事のあと」のことを指すようである。とりあえず「痕」を二つに分類してみることにする。ひとつは机についた傷や手垢、交通事故現場に残されたタイヤの跡、ボディーのすり傷などの物理的痕跡である。もう一つは、置き方、重ね方、など人々の作業の積み重ねの結果できた痕を示す状況的痕跡である。痕跡と言うことでイメージされるのは圧倒的に物理的に付いた痕跡の方である。

そこで、ここでは状況的痕跡に注目してみよう。写真4は、デスクの脇に取り付けられたライトのアームに、たくさんのクリップが止められ、さらにシェードの縁にはクリップでメモが止められている。3) 手を伸ばすとちょうど良い位置や、アームやシェードの形状がこのような行為を誘導

したために生まれた痕跡である。写真5は、某編集者の持ち物である。スチール製引き出しの前後差が作り出したコーナーが、ものを置くことを誘導し、取っ手の付いた紙袋がそこへ置く動作を容易にさせた結果の痕跡である。4)



写真4 ライトのアームと止められたクリップの様子



写真5 堆積した紙袋の様子

雨の中車を運転中、フロントウィンドウの雨粒を拭き取るワイパーを見ていると、所々線状の水痕が若干残って、前方の視界が悪くなってきたことをふと気づかせる。これがサインとなり、ワイパーのゴムブレードの取り換え時期を知ることになる。日々の生活の中で利用している痕はかように様々である。

3) 思考の跡

紙の上に書き記されたものの多くは「思考の跡」を物語っている。数学の証明に費やされた鉛筆の痕は思考の跡そのものといえる。設計士の製図や画家のデッサンも思考の痕で埋め尽くされてきたことであろう。しかし、ここで思考が先にありその結果跡が作られたと早合点すべきではない。自分の引いた線、図、文字などの跡があったからこそ次々に思考が誘導されたと考えられるからである。

できあがりだけを見ていたのでは、思索のあがきや戸惑い、試行錯誤が見えてはこない。あたかも痕跡がなかったように結果を提出する心理は鑑賞する側にその謎解きを強要させたいからであろうか、はたまた潔癖症的な心情であろうか。

人間が描いた痕跡は、ここではこれ以上述べることはしない。なぜなら、人間の表現行為はさらに複雑な分析が必要となるからである。5)

4) 意図を込めた痕跡

われわれが見る一般的な木製の仏像は、その表面が滑らかに彫り込まれた姿態を持つものが多い。しかし、中には円空の彫った仏像のように鉋やノミ使いの跡が木にそのまま残されている仏像がある。ノミの痕が荒々しく残されたその仏像から、仏像を造る工匠のノミ使いや勢い、感情までもが読み取れると言われ、芸術的境地にあるとして高く評価されている。そうした仏像はきれいな表面を持った仏像とは違い、仏像制作過程を間近に見せてくれる。人はそこに美的な要素さえ感じ取ることができ、人を引きつけてやまない。これとは別に、鉋彫り（なたぼり）と呼ばれる表現形態を持った仏像があり、粗彫りからノミを一刀施すごとに、次第に木から仏像が姿を現す過程が意識されている。神奈川県弘明寺の十一面観音菩薩立像^{*4}に見られるように、像の横方向に深いノミ跡を整えて残し、一本の木から仏像が彫り出されるプロセスを強調して、作者が仏像出現の演出効果を狙ったものである。

3.2 痕跡から何を読み取るか

痕跡から何が読み取れるのであろうか、ざっと挙げただけでも以下の項目が出てくる。行為の a) 方向、b) 量、c) 勢い、d) 数、e) 手順、f) 経過、g) 傾向などがある。いくつかの例を示してみたい。

例1) 一過性の痕跡

グレンデを滑るスキーヤーのスキー板のシュプールは一過性の痕跡ではあるが、それはスキーヤーの技能までも映し出している。エッジで雪面を捉えるタイミングは適切か、余分なスキー板のズレが生じていないか、弧の形、長さ、深さはどうか、突かれたストックの位置はどうか、

などからスキーヤーがどのような姿勢で斜面を滑走してきたか、どれほどのテクニックを持った者なのか推測される。(この他にもスポーツにおける痕跡利用例は多い。)

例2) 道具に残る痕跡

ホームランバッターでは、バットの芯の近くに跡が集中する傾向にあるが、一方ミート打法の選手では、バットに残るボール跡は結構散らばっている。

例3) 堆積してできる痕跡

ビルの階段のピータイルの磨耗箇所をつなげて見ると、その階段を大急ぎで、あるいは最短で上り下りした人々の姿が、アンケートや統計を取るまでもなく平均的行動のパターンとして現れている。^{*5}

また、パソコンを使用する時のキーボードには、ローマ字による仮名漢字変換を中心に行う人では母音であるAIUEOの使用頻度が高くなり、他と比べて汚れや磨耗が目立つ。

例4) 癖が作り出す痕跡

「癖」といわれる現象の多くも、行為の痕跡から証拠づけられる。靴のかかかに残る摩耗パターンは多様であり、体重や使用期間以外にも、その人の歩き方、走り方が影響していると考えられる。研究により、足部にかかる力と靴の摩耗パターンが関連していることが判明すれば、歩く姿勢の矯正や脚部への負荷の軽減を示唆できるかもしれない。同じように生活習慣病に関わる様々な習慣の癖も痕跡から発見できるかもしれない。

例5) 動きを可視化した痕跡

写真家のGjon Miliは、パブロ・ピカソがペンシルライトを持って空間に描いた線の軌跡を写真に記録した。^{*6}一過性のペンシルライトで残像を痕跡としてみれば、それがすばらしい芸術作品になっていたことが分かる。分野は異なるが、動きを撮影することで、労働者のモーション・スタディを確立したギルブレイスも手足の軌跡を利用した。また、G.Johanssonは、身体に豆電球を身に付け様々な動きをさせて、暗闇でのその光の軌跡から、静止状態からでは得られない数々の知見を導き出している。⁶⁾

例6) 恣意的に作られた痕跡

痕跡には、他を欺くために意図して残すものもある。カナダのバータ靴博物館(Bata Shoe Museum)に展示してあったカモフラージュソールは、戦場では足跡が発する情報は生死を分かち重要なものである。そのことを逆手にとった工夫が、ベトナム戦争で実際に使われた軍足のカモフラージュソールである。本来の靴底に、カモフラージュ

されたソールを貼り付けて、あたかも住民がそこを歩いて行ったかのような足跡をつくり、それにより敵を欺くためのものである。

痕跡により欺かれるということは、痕跡を発見した人がそこから意味を見つけ出したということでもある。しかし、これはその時点では「そう思える」だけであって、まだ確たる事実ではない。痕跡は読み間違える可能性があるからである。

第5章では、行為の結果残された痕跡を手がかりに、痕跡そのものが応用されて、さらなる人間の行為を誘導しようものになり得ることを述べる。しかし、その前に痕跡を痕跡学にまで格上げできるのかどうかについて考えてみることにしよう。

4. 痕跡学は可能か

4.1 時代に逆行か

西部劇での追跡シーンでよく見かける光景に、馬上の追跡者が逃走者の馬の蹄跡からどれぐらい前についた跡で、逃げる方向、早さ、人数などを読み取る仕草があったように記憶している。現在から見れば野蛮で科学的ではない経験と勘の世界のようで一笑に付されてしまいそうである。また、跡を探したり痕跡ができるまで待つことなく、近代的な探索装置で実物の動きを観察する機会が増えている。遠隔操作できるカメラ撮影やビデオ録画、音声録音が可能であるし、衛星からも撮影が可能になっている。センサー技術も自動監視・撮影に貢献する。

何よりも、情報の一部である痕跡は、リアルな実物・実動には情報量でかなわないところがある。P.アンダーヒルによるショッピングの科学では、トラッカー(tracker)が大活躍する。彼らは買い物客にぴったり張り付いて、その行動の一部始終を記録していく。もっとも彼らが使用する道具は、とびっきりのハイテクではなく、普通の紙の記録シートではあるが。⁷⁾

ところで時代に逆行するかのような痕跡探しに「痕跡学」という名前を冠することは、はたして受け入れられるのだろうか。次に紹介するピラミッド建設の新説が微かにその可能性を暗示してくれている。

4.2 ピラミッド建設の謎(新説)

理由を問いかけた時、初めて見えてくるものがある。例を挙げて説明しよう。

古代エジプトで5000年前に建造されたといわれているピラミッドがどのようにして建設されたかご存知であろうか。いつの頃に、誰によって言われたのか定かではないが、一般に定説として言われてきた建設の方法は、ピラミッドのある高さまでは砂で斜面を作り、その斜面に丸太を置いて、その上に巨石を乗せて大勢の人がロープ

で引き上げた、というものである。また別の説では、ある程度の高さまでいくと、そのあとはすでに出来上がった四角錐の4面外側に螺旋状の斜めの足場を作って引上げたのだそうである。ところが、近年、ジャン・ピエール・ウーダン（Jean-Pierre Houdin）というフランスの建築家が、それまでのピラミッド研究家、考古学者が考えもしなかった全く新しい建造説を発表して世界中を震撼させたのである。

従来の建造説では、ピラミッドの底辺から3分の1段までは、斜度13度の斜面をピラミッドに使用する巨石を積み上げて造り、そのあとは四角錐の4面の内部に螺旋状のトンネルを造り、かつて斜面に使用した巨石を、そのトンネルを通して引上げ再利用したというのである。そもそもピラミッドの高さまで砂で13度の斜面を作るという仮説では、斜面の長さがピラミッドの頂点から1.6キロの所に来てしまうというのである。ピラミッドのすぐ傍で加工された巨石は、1.6キロの所まで迂回して引き上げたことになってしまい、事実上不可能だというのである。しかも、近年になってピラミッドの近くで発見された労働者の住居跡には25,000人の労働者が住んでいたことが分かっていて、試算によればこの人数で20年間という短期間で作ることはできないのである。

ピラミッドの四角錐の4面に螺旋状の斜めの足場を作る説に対して、ウーダンは建築家らしい見解を述べている。というのは、ピラミッドの外側に足場を組むやり方では、その足場自体が邪魔して四角錐の4つの稜線が真っすぐになっているかどうかを下から確認することができないというのである。稜線の直線は、誰かが目で見て揃えなくてはならないはずが、それができないのではないかと疑問を持つ。現場の施工に詳しい建築家ならではの現実的な見解である。彼は、そうではなくて、ピラミッドの4面の内側にトンネルを作って巨石を引き上げ、後に石を積んで形を整えたと考えたのであるが、その説には根拠がある。それは、ピラミッドの外観をよくよく観察すると、構成する4面に、ほんの僅かであるが違った色の石のラインが13度で螺旋状に残されていることに気がついたのである。ウーダンは、イギリスの考古学研究組織に連絡して、同組織がかつて行ったピラミッド内の重力測定結果を見て確信を持った。

それは、内部200か所で行った重力測定の結果、ピラミッドの内部には、不思議な軽重力の場所が連なっていて、それをシュミレーションソフトで可視化してみるとピラミッドの4面にそって螺旋状につながっていたのである。このイギリスの考古学研究組織は、報告書までは書いたが、それ以上の考察を進めなかった。

ピラミッドが建造されたと同時代に、他で建造された小型のピラミッド遺跡を観察すると、崩れ落ちたピラミッド

の4面の内部に、確かに斜めの通路が作られていた。さらに彼は、今日では許可がなければ上ることのできないピラミッドの一つの稜線上部に、遠くから観察して欠け落ちたような稜線の乱れがあることに気がついた。それまで、だれもが単なる崩落の跡だと思い込んでいたその場所は、螺旋状のトンネルが崩れて現れた空間だというのである。

ピラミッドの3分の1までは、巨石を使って斜面を作り、その上を一つ2.5トンの巨石ブロックを引き上げて敷き詰め、その後すでに4面内部に作っておいたトンネルを使って斜面に使用した巨石をトロッコに乗せて一つ一つ人力で引き上げたのである。ピラミッドの各コーナーには、4グループの引き上げ作業者が組織的に配置されていて、一つのグループが上り詰めると三俣とナツメヤシで作ったロープを使って持ち上げ、向きを変えてトロッコに乗せ代えて、次のグループにバトンタッチしていく、というやり方である。渡し終えたグループはまた元の位置に戻り、下からやってくる石を待つので、極めて組織的で効率的である。この向きを変える場所こそが、稜線にある崩落跡だと思われる場所なのである。持ち上げた巨石は、持ち送り積みといわれる積み方で平たく積み重ねられ、同時にトンネルも延長していった。

さて、ピラミッドの底面から60メートルの内部に、「王の間」と呼ばれる空間があり、すでに盗掘されて空になった石棺が一つ残されている。この「王の間」の天井には一つ60トンにも及ぶ長方形の御影石が43本井桁に積まれている。この空間は、「重量軽減の間」とも呼ばれ、ピラミッド全体の内側に沈みこもうとする応力を逃がしているといわれている。そしてこの「王の間」に至るために、大回廊と呼ばれる大空間の斜面が26度の角度で作られている。

ウーダンは、この超巨大な石材をどのように運びあげたのかを考える際に、大回廊に残された痕跡を徹底的に、つぶさに、そして注意深く疑問を投げかけながら観察した。現在では観光客が歩くために、そのほとんどは板状の階段で覆われているが、彼はその下に潜り込んで懐中電灯を照らして観察した。大回廊の階段の左右には、滑り台のような一段高い平面が作られていて、その石材には等間隔で四角い穴が穿ってある。かれは、先の60トンの超巨石は、この巨大回廊を通して引き上げられたのではないか、という仮説を立てたのである。それは大回廊の滑り台の側面に、何度も何度も何かが通った時につく傷跡が筋状になって残されているのを見つけたからである。さらにその筋状の傷跡には、何か黒いタール状のものがこびりついていることも見逃さなかった。超巨石を乗せた木製のトロッコにヤシの油を潤滑油として塗り、少し引き上げては先の四角い溝に杭を打って一息つき、また引き上げては杭で止めるという安全な方法であったというのであ

る。さらに、大回廊の上部にせり出した石の3段目だけに、何かがぶつかってついた欠けた跡がやはり筋状に残っていたのである。

エジプト考古学の第1人者といわれるザビ・ハワース博士も、この発見に驚愕する。ウーダンはフランスのエッフェル塔のエレベーターに採用された「釣り合い重り」というワゴンの昇降方法を知っていた。大回廊からこの巨石トロッコを引き上げるためには、これと同じ方法で大回廊とは反対側に同じ重さの釣り合い重りをつけて、その重さで引き上げたのだという。当時のロープはナツメヤシの繊維から作られており、一本のロープで24.5トンの重さに耐えられたという実験を通して、この方法が不可能でないことを知る。彼は「王の間」の上部の石材に、ロープでこすられて丸くすり減った溝を見逃さなかった。当時エジプトの周辺には、強度があって加工しやすいレバノン杉が群生しており、運搬用トロッコや「釣り合い重り」方式の骨組を作ることは容易であったはずである。彼は、中国北京オリンピックでメイン会場となった通称「鳥の巣」を設計したフランスの建築会社に、この「釣り合い重り」方式が可能かどうかを相談する。この建築会社は、実際の実験をせずに、コンピュータの中で構造強度実験ができるソフトを開発して、「鳥の巣」の受注に成功した気鋭の会社である。実験の結果、この方法は全く問題のない方法であることが証明された。^{*7}

この話で驚かされるのは、ウーダンは痕跡の中に意味を発見したが、長い間、痕跡はそこにあったはずなのに、なぜ多くの研究者（この中には建築や土木の専門家もいた）がその痕跡を見ることができなかつたのかという点である。見る人によって何の価値もなさそうなものが、ある人の経験と重なって獲得されたとき、取るに足らない情報（痕跡）が輝きを持って意味を放出するのはなぜなのか。^{*8}

情報は用意されているが送られてはこない、必要とする時に気付いてくれればそれでよい、訴えかける必要もない、自信ありげに悠々といつまでも待っている、といわれてもにわかには信じがたい。地道に歩むしかなさそうである。

4.3 痕跡ができる理由

痕跡ができる理由を説明する際には、痕跡次のように分けることが必要かもしれない。一つは、一過性の痕跡であり、もう一つは堆積（繰り返）してできた痕跡である。一過性には、たとえば、片刃の包丁（右利き用）で切った野菜は切り口が左側に円弧を描くことが見て取れる。先のスキーヤーの新雪の斜面に作り出されるシュプールなどもそうである。^{*9}

一方、堆積してできた痕跡には、長年使われてきた道具類にその痕が貯まって（刻み込まれて）いった様子が



写真6 長年使いこんだ玄翁の柄が摩耗した様子

うかがえる。

写真6は、ある鑿（やすり）製造所の職人であるA氏が45年間使い続けたという玄翁である。これは、鑿に目を刻む際に使う鑿（たがね）の頭を打つ時に使われるものである。柄の部分に残された磨耗からは、人差し指の掛かる部分の方が、親指の当たる部分よりも深く磨耗している様子が分かる。これは、玄翁を持ち上げる時に人差し指の触れる部分に大きな負荷がかかっていることを示している。つまり鑿職人の使用する玄翁は、振り下ろして使われるものではなく、持ち上げて落とすように使われているのである。痕跡から職人が道具を使っているときの姿が浮かんでくる。

また、先に述べたバットに残るボールをミートした場所の跡は繰り返し繰り返し練習してきた結果である。このほかに次のような行為の様子がうかがえる例がある。

例1) インフォメーションボード上の磨耗

写真7は、千歳空港の「味の名店街フロアー」の一角に立てられた各種飲食店の位置を示すインフォメーションボードである。この配置図には、様々な飲食店が黄色く示されていて、各店の区画ごとに通し番号が印刷されている。その中に、印刷の磨耗が激しい場所があった。なぜここだけが際立って擦りきれているのか?と思い、その場所を探していくと、1つは現在地、1つは「㊿サッポロラーメンの店」であることが分かった。遠方から飛行機で千歳空港に到着した利用者は、食事を何にしようかとこの配置図の前に立ち、家族で、あるいは友人と北海道らしい店を発見してその位置を指で押さえたに違いない。印刷が磨耗している情報からは、食欲をそそる地域のブランドメニューに寄せる大きな期待など、北海道に到着して間もない旅行者のはやる気持ちがうかがわれる。



写真7 インフォメーションボードに残された摩耗の痕跡

例2) エレベーター内の昇降ボタンの痕跡

写真8は、ある病院のエレベーター内の昇降ボタンのフレームについての摩耗の痕跡である。利用者がエレベーターに乗り、昇降ボタンに向かって向きを変え、指を立てて行先の階番号を押すだけでは、ボタンが配置されているフレーム付近に摩耗の痕跡が残るはずがない。フレームに摩耗の痕跡が残るのには理由がある。特に、摩耗の痕跡が昇降ボタンのフレームの右側上部に残されている点は見逃してはならない手掛かりである。

エレベーターのボタンを使用する者は、早く歩くことのできない高齢な親族や足に怪我を負った患者に付き添っている場合が多い。先にエレベーターの中に入った利用者は、「開」のボタンを押したまま患者を導き入れるまで待ち、入りきったところで「閉」のボタンを押すことになる。この時、右手指先でボタンを押す前に、掌を開いてフレームの淵に数本の指で触れ、手の位置を安定させてから、その位置を起点にして別の指で「開」、「閉」のボタンを押しているのではないと思われる。われわれがコンピュータのキーボードを打つ時、掌を浮かせて構え、指先だけでキーを打っているのではない。掌のどこかをキーボードの角に置き、そこを起点に指を動かしているのと同じように似ている。

痕跡に注目して、自分や人の行動を振り返ってみると、わずかな違和感に気づかないだろうか。自分の行動は、大して意識せずに行われていることに。いやむしろ、ほとんどの行動は、なにも考えずに行っていることに。そして、なにも考えずに行っているのに、毎回ほとんど同じ行動をとっているということに。他の人の行動も、まるで集団催眠術にでもかかったかのように同じ行動をとっているということに。

だれかに「廊下の角は最短距離でまわれ」と強要された覚えはないし、電気のスイッチを手探りで探すゲームに参加した覚えもない。芝生にできた獣道のショートカット



写真8 フレームに残されたついた摩耗の痕跡

を通行してよいと特別に許可を受けた覚えもない。なにも考えずに、自然と振舞っていたら同じ行動をしていた、というのが本当のところではないだろうか。結果、痕跡として現れる行動、そしてその行動を起こそうとした理由は、実に説明しにくいのである。

しかし、だからこそ痕跡の情報は見るものにとって価値ある情報になる可能性を持っている。恣意的に傷をつけても、その痕跡は恣意という意味以上の情報をわれわれに教えてはくれないだろう。そこに意図せず付けてしまう痕跡ほどには価値を持ち得ない。なぜなら、「意図せず」「考えなしに」「意識なく」行う行為を説明しようとしたとき、とりわけわれわれ人間の行動を描写する際に用いる重要な概念を、心に関する特殊で目撃不可能なもので行わないですむからである。痕跡という外的事象は傾向性(dispositions)を表す語によって描写し説明することができるからに他ならない。同時に痕跡はその環境的状况とセットで記述されなければ意味がなく、説明に外的要因への注視が伴っているので、必要があればそれが詳らかにされるチャンスが増える。痕跡発見者への質問も、動機や気分、経験や勘、内観や省察など心的で検証不可能な作用因に求めず、テスト可能な仮言的言明が帰ってくるようにもっていける。4.2で取り上げたウーダンの新しい説明はこのことを如実に物語っている。

4.4 部分的補修に見られる痕跡

車のたくさん走る道路では、タイヤの通過する部分が少しづつ削られた二本の溝ができる。それを補修するために、窪みにだけアスファルトを埋めた一時的な修理が施された道路を見かけることがある。全面的な改修ではないので、かえって平坦に見える道路にけっこう大きな溝が作られていたことがわかる。補修された溝の両端はその後車が頻繁に走ることで次第に剥がれていくことで、補修前の窪みの深さが、少し見える放物線によって大体想像がつく。それによりかくも大きなうねりを持っていることを知る。補修が完全になされていないことで、元々そこにあった痕跡が鮮やかに浮かび上がるということがある。

中世のヨーロッパでは、文書は羊皮紙に書かれていた。羊皮紙は貴重であるためそれを再利用していた。書かれていた文字を削り、その上に新しい文字を書き込んでいた。しかし、前に書かれた文字は完全に消し去られることはなく、うっすらと痕跡となって残ったものも多くあった。このお陰で、古代文書が何層にも書き重ねられた中から蘇らせることが可能になった。有名なものに「アルキメデスのパリンプセスト」がある。

J.A. コインはこの喩えをもちい、生物の歴史もパリンプセストである、という。すなわち、『動物や植物の体内には、その先祖を示す手がかり、進化を立証する手がかりが隠されている。しかもその数は少なくない。たとえば「痕跡器官」という特殊な特徴がある。』¹⁾ 人間にもある痕跡器官には尾の名残である尾てい骨や盲腸などがある。ただし、これらは今では名残であって特段の機能を果たすわけではない。しかし、進化を論じるときには重要な手がかりとなるのである。そして、コインはこうした痕跡器官が無駄で、用を足さないとばかりは言えないという。ダチョウの羽はもはや飛ぶためには使えないが、速く走るために体のバランスを保つためには欠かせないことを示し、祖先の持っていた特徴が新たな用途を見つけ出すことがあるという。

進化論の文脈では、全く新たな創造は起こらない、前にあったものの作り替えによってしか変化を生み出すことはできない。前にあったものを痕跡からの情報として捉えれば、痕跡から発想するとは、自然で理にかなった新たなものをデザインし、作り出す一つの方法になるのではないだろうか。

4.5 環境にあるアフォーダンスと痕跡

もう一度、ガソリン給油所の写真1、2を見ていただきたい。

このスタンドで働いている人が最初にこのような行動を取ったとき、彼は必要に迫られてこのような行為を取ったと考えられる。使い終わったエアージェットを戻したいとあた

りに注意を払うと、目的の対象そのものではないが、その対象に「エアージェットの戻し場所」という固有の意味を見いだしたわけである。これは「環境にあるアフォーダンスを捉えた」瞬間である。それが意外と、その時のふさわしい行為であったからこそ、その後も同じ行為をし続けたいに違いない。その結果が写真のように痕跡として残り、いまもその跡に誘導されながら作業の一環として十分に機能を果たし続けているのである。痕跡の発生をこのように捉えれば、痕跡ができる特有の理由とできた痕跡がさらに特有の行為を誘導する仕組みが明確になる。

このような現象の発見が痕跡学の原点ではないかと考えるわけである。しかし、痕跡学はこれが出発点とならなければならない宿命を負っている。それは、この痕跡を手掛かりに、新しいシステムのデザインや、物作りに役立terるといふより実践的な目標を掲げることができるからである。

本論はここまでその手始めとして、痕跡（環境にある情報）に気づくことの重要性を論じてきたわけである。ギブソンの言を借りれば、『行動は、原初的な不随意の反射を徐々に随意的に制御することによって発達する、と仮定することは不毛である。将来性があると筆者らが考えるのは、能動的な知覚は環境のアフォーダンスを探ることによって制御され、能動的な行動はそれらのアフォーダンスを知覚することによって制御されるという仮定から始めることである。』²⁾ となる。「環境のアフォーダンスを探す」という一部に痕跡が利用できるのではないかと考えられる。

人間は、「アフォーダンスに満ちた環境を経験し、そこでふさわしい行為」ができることから、環境や道具やものに違った役割をみつける習性があるようである。そうした事例も参考になる。意図とは違う使われ方をしたとき、そこにもアフォーダンスが発見されたといえる。裏を返せばアフォーダンスがあまりにも当たり前すぎて、普段は気づかないのであろう。

ガソリン給油所の事例は、あり合わせの材料でまにあわせる典型である。これをエンジニアリングでは、ティンカリング（ブリコラージュ）と呼んでいる。Thoughtless Acts 8) という一見して風変わりな写真集は、外的環境を考えなしに利用する人間行動の機微を捉えている。この様子を捉えたデザイナーは（とくにインダストリアル）それを様々な商品やシステムのデザインへの発想源として利用できる。デザイナーたちは、日常行動のリアリティに遭遇し、あるいはその使用のされ方に驚愕し、自身の設計活動に少なからず影響を受けるのであろうか。こうしたことに肯定的に反応して、また参照することで、人々の欲求や期待に対してデザイナーはもっと敏感になれるのではないだろうか。つぎに痕跡を利用する段階について紹介することにしよう。

5. 「ものづくり」に痕跡を利用する

職人の仕事場は痕跡の宝庫であるが、だれもそれに気づかないし、ましてや利用しようなどとは思わないものである。村松貞次郎は職人の仕事場をマイクロコスモスと称して自ら次のように観察を記している。

『仕事空間は人間定規でもある。金敷の小さな傷、目につかぬほどのくぼみ、あるいは錆の一つ、それが鍛冶の物差しである。・・・行程のいたるところに無数の物差しが、定規が、置かれているからだ。金槌の頭も、削り台のノコギリ（鋸）の痕も、土間の穴ぼこも、そして自分の指も、掌も、腕の長さも、もちろん道具も定規になる。職人は自らをその仕事空間に囲い込む。小宇宙、マイクロコスモスである。』³⁾

職人にとって仕事場は彼だけの道具に等しい。長年の道具使用が痕跡を作り、その痕跡が作業の立ち位置、姿勢、眼の位置を瞬時に安定させ、行為をスムーズに運んでいく。仕事場が他人によって片づけられたり、整理整頓されてしまえば、仕事の手順さえ失われてしまうことになる。今このことに注目して「ものづくり」を考えてみよう。

プロフェッショナルの高い技能を支えているものが、体内（皮膚の内）にその理由があると考えるときには、その発見は不可能であるか、あるいは高等な推理に頼らざるを得ないかであろう。しかし、プロフェッショナルが痕跡を手がかりに、次の行為を決めているのであれば、その痕跡の同定ができれば、謎の一端は素人と共有できるかもしれない。この方針に従って、制作方法や技能を痕跡の形で意図的に語らせれば、人は痕跡から情報を読み、自然な作業過程（行為）に導かれていくことになる。^{* 10}

ここでは、ある木工関連実技授業で、教示用に「工夫された痕跡作り」がなされているので、それについて説明してみよう。

5.1 痕跡を利用して「ものづくり」を伝える

工業製品、工芸品の作業工程を丹念にたどれば気の遠くなるような複雑な作業工程から出来上がっているはずである。その過程に、それ独特の痕跡が発生していると考えれば、その痕跡を作業工程の極めて重要な情報として活かす道があるかもしれない。とくに教育的な状況や技能を伝達するような場では痕跡の利用を考えてみる価値がありそうである。

制作過程を複数の視点からビデオ撮影して工程のすべてを記録して残すことが可能である。工程の一切を隈無く記録して残しても、実際にはそれを繰り返し見て参考にするということは頻繁にできることではない。作業の難しい箇所を詳細に追った記録は、ある程度の熟練者には価値ある情報であるが、初心者にとっては、見るべき場所の定

まらない教材となりかねない。

以下の例は、実験的な試みではあるが、木製の匙を作る全過程を写真に収めて、いつでも参照できるようにしているものである（写真9）。写真のポイントは、匙になる木片と手の位置、そして加工に使う切削道具の動く方向や角度が分かるようにしてある。ここで最も重要と考えたのが、切削道具が匙の木片にあたり、そこで発生する削り屑を必ず写真の背景に見せることである。それにより、刃物の入れ方、削り屑の細かさ、厚さ、大きさなどの情報が目から得られる。それは、同時に匙を切削していく各段階でも力の入れ具合、左手の匙の握り具合など、漫然とみるビデオではえられない緊迫感のある情報が得られるように工夫したものである。

荒削りから仕上げの削りまでの何段階にもわたる作業の一部始終がなぜ必要なのか。やってみるまでは注意さえしなかった工程の意味がこの写真の作業風景で気づかさ



写真9 匙の制作工程を示す写真集

れるようになる。同じ工程を辿るためには、工程の見取り図ではなく、各作業ででてくる木屑に注目すべきであるということがすこしわかってくる。

写真10は、木材の組み手を加工する際のホゾの写真で、鋸を引いて切断した際に残った鋸目の痕跡を意図的に残したものである。このホゾを加工する際には、はじめに鋸を使ってあらかじめ付けた仕上げ線よりも若干多めに材料を残して切削する必要があるが、初心者にとって仕



写真 10 ホゾの切削面に残した鋸跡

上げの線から少し逃げたところを目指して、均等に切削する事は簡単な作業ではない。切っているうちに、鋸の切削方向が内側に曲がって仕上げ線を切ってしまうたり、死角になった側の様子が見えないために止める位置を見誤ったりするからである。写真のホゾに残した鋸目の痕跡には、まず木口の側からそれと平行に鋸を入れ、5～10ミリ程度切り込んでから手前の線に沿って斜めに切り込み、次に反対側の線に沿って斜めに切りおろしていった様子を示している。こうして切削すると、内部には切られていない三角形の場所が残ることになる。最後にこれを平行に切ることで、あらかじめ付けた仕上げ線よりも若干多めに材料を残して正確に切削する事ができる。この痕跡は、こうした動きを読み取ることができるようにこの工程で加工を止め、意図的に残したものである。

5.2 痕跡を改善やデザインに利用する提案

不特定多数の人間（あるいは個人）が、長い間に作り上げた痕跡は、個々人の行動習性を超えて、人間の行為の不変性を表わしている。長い時間をかけて作られる痕跡は、個人の行為の仕方を如実に表している。先に述べたバットに残るミートの跡、あるいは、まな板に残る包丁の跡が行為の様子を物語っているのであれば、それはバットの形状を変化させたり、長さを変えたり、芯の位置をずらしたり、様々な変更・改善を試せることになる。まな板についても同じことがいえるだろう。

自らの行為に反省的である人は、たとえ痕跡が物理的につかなくても、あるいは物理的につくまで相当な時間がかかるのを待つまでもなく、行為の軌跡を意識でき、それに満足したり違和感を持ったりするであろう。このように情報に誘導された行為の軌跡も（見えないかもしれないが）痕跡として考えたい。デザイナーはこのようなことができる専門家であるともいえる。見えない行為の軌跡は、そこに望まれた要求があるということを知る手がかりになる。さらに、重要なことはデザインを考えるヒントになるということである。このことについて筆者のひとりが実施したデザインの例を用いて説明してみよう。

例 a) ベルトサンダーのベルト収納棚

木材を加工する際には、ベルトサンダーという研磨加工機械を使用する事がある。このベルトサンダーは、強靱な布製のベルトの表面に細かな研磨材の粒を接着剤で塗布固定し、このベルトを機械にセットして回転させ、木材を研磨する加工機械である。製品に求める研磨の程度に応じて、粒の細かさの異なる複数のベルトの中から適切なものを選択し、すでにセットされていたものと取り換えて使用するのが一般的である。

写真 11 は、富山大学芸術文化学部加工機械室のベルトサンダー付近に、取り換えて外した方のベルトを置き去りにした痕跡である。

ベルトサンダーのベルトは、強い弾力性を持っているために、複数回折りたたんでも、元の楕円形にもどろうとする力が働く。ベルトを外したものの、この置き場所に戸惑った使用者は、折りたたんだままで抑えの利く場所を探し、やがて適当な場所を発見して置き去りにしたのではないかと考えられる。この痕跡からさらに細かく洞察すると、ベルトの感触から小さくたたむ必要性を感じてそうしてみたものの、手を離したら広がってしまう性質が、思いがけなく厄介なものであることを知り、広がらないような置き場



写真 11 置き去りにされたベルトの様子

所の必要性を感じ取る様子や、そして適当な場を発見しようとする探索の行動を起こし、そして適切な場所の情報に誘導されて最適な場を発見し、その場をうまく利用して置いていった・・・そのような行動をうかがい知ることができる。



写真 12 新たに設計制作したベルトの収納棚

そこで、この痕跡を設計の糧に、写真 12 のような収納棚を制作設置した。ベルトは、機械の駆動部分と同じサイズの円筒に掛けることができ、円筒には粒度の表示を施して、取り出しやすく戻しやすいデザインにした。掛けたベルトの下には、円筒形の重りを置いて、湿度の変化によるベルトの変形を抑える工夫も行った。棚の上部には、粒度の異なるベルトのストックを置き、傷んだベルトを廃棄して、すぐに新しいものと交換する事ができるようにした。こうして機械室の隅で発見した痕跡から、使用者の要求、戸惑い、即興的工夫などを読み取り、デザインに生かすことができたのである。もしもこの痕跡がこのように価値あるものとして扱われなければ、痕跡は使用者の戸惑いをそこに写しだしたまま、機械室の管理者や指導者の、改善に対する関心ある眼差しを延々と待ち続けることになる。痕跡から学習しようとしなければ、痕跡は改善を訴え続けるのである。^{*11}

例 b) トイレの棚

用を足すだけにトイレを利用する人もいれば、そこをしばしの休息、安息、思考の場とする人もあるだろう。滞在する時間が長ければ調度される品物は意識されやすいし、心地よさの重要な決め手になる。ただし、いつも繰り返される行為の軌跡にながしかの不満を気にしつつも改善意欲を喚起するまでにはなかなか至らないものである。しかし、その習慣に思い切った改善の嵐が吹けば、日頃の不自由な痕跡からアイデアをもらって新たな調度が試されることになる。そのためには、トイレの雑然とした痕跡を見て、そこにいない人の動きを見ることができなければならない。そして、予備のトイレトーパー置き場と、本を入れる場所と、スプレー洗剤置き場を持った棚を取り付けようと、スケッチを開始した。制作時には既にトイレを使う人の動きが手に取るように見えてこなければならぬ。結果、以前は、狭い置き場所を競って、角突き合わせていたトイレトーパーや洗剤、雑誌やタオルなどがその領分を確保され、しかも、その機能性までもレベルアップさせて蘇る。(写真 13、14)

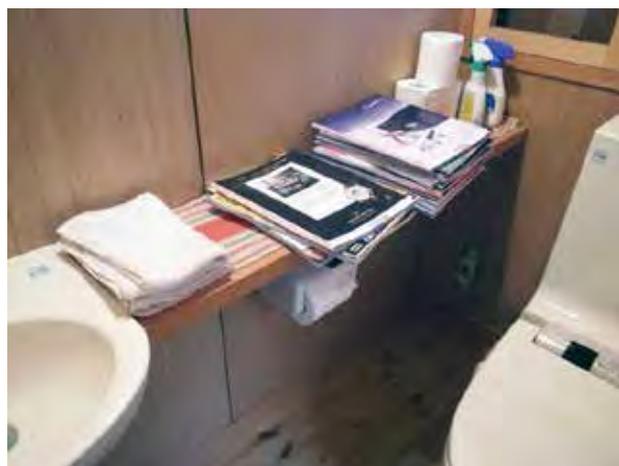


写真 13 改善前の棚の上の様子



写真 14 改善後に制作した棚の様子

例 c) 置かれた包丁

台所の包丁は、よく使われるわりには大事にされることの少ない道具である。頻繁に使用されるために手近にしまわれていなければならない、かといってぞんざいに扱えないし、危険も未然に防がなければならない。利用のしやすさは不注意を誘発し、ちょっとした怪我の発生を伴ってしまいかねない。写真 15 は、ガス調理器の横にできた小さなスペースを、何時の間にか包丁の置き場所として利用し続けていた痕跡である。自然発生的に始まり、そして幾つもの包丁が重なるように置かれている様子は雑然としているように見えるが、この包丁の居場所は主婦の効率的な行為の軌跡（痕跡）となっているに違いない。その流れリズムを壊すことなく、しかも安全に、できれば整理整頓した時の姿も美しく確保したい。写真 16 は、そんな欲張りな求めを満たそうとした一つの試みである。これは意識しなければ始まらないが、なにげない道具の利用痕跡からの発想からできた引き出しである。

例 a,b,c に共通しているのは、レイアウトに見られた痕跡が新たなデザインへの引き金となっている点である。もちろんこれらを痕跡として捉えることが容易であるとは考



写真 15 重ねて置かれた包丁の様子



写真 16 包丁が収納された引き出し

えていない。レイアウトは日々変化し続けているであろう。この場合、傷や汚れとなって目に見えるわけではないが、起こっている出来事に多様な意味を見いださなければならない。どのようにすればその意味を見いだせるのだろうか。

デザインという言葉は、新たな創造を作者に求めすぎではないだろうか。痕跡からのデザインでは肩肘を張らずとも、痕跡から得た情報を基に始めればいいことを教えてくれているように思える。T. ケリーは、デジャヴ（既視感：実際は一度も体験したことがないのに、すでにどこかで体験したかのように感じる。）の反対の意味を持つヴュジャデなる語でもって、いつも経験しているものに驚きを感じることの重要性を説いている。9) ただし、普段みているものに驚きを感じるためには何が必要なのだろうか。視点を変えるというような内的努力を要するものではなく、われわれはこの驚きに痕跡も仲間入りさせられたらと思う。上にあげた例でわれわれはそれを少し意識的に行ってみようではないかと、と提案したに過ぎない。そうすれば、人がつけた痕跡から情報を読み、より自然な行為に導ける新たな設えに至るのではないかと。

さらに言えば、モノを作ったり、デザインするという仕事は、先回りして罫を仕掛けるマタギのようなものだといえる。雪の中に罫を仕掛けるマタギは、試行錯誤を重ねながら動物の動きに合わせて罫を進化させている。仕掛けていく時にすでに、動物の動きが手に取るように見えている。

何も無いところから発明に近い発想を求める必要はない。すでにある平素の生活周辺のさまざまな痕跡に意味を見出す視線が大切なのである。

6. おわりに

私たちの身の回りには、痕跡を見つけるチャンスが溢れている。もしも何かの痕跡に気づいたならば、その場でスケッチや写真で記録してほしい。その時、痕跡そのものだけでなく、周りの状況も詳しく記録に残すように心がけてほしい。

最後に、動物の足跡に並々ならぬ関心を示したシートンの声に耳を傾けてみよう。

『もし、わたしが真剣に何かに関心をもち、それを求めつづけていくと、その対象はやがて自分の生活に大きくはいりこんできて、そのようなものを求めている人には知られることのないものを知る機会を与えてくれることだ。』

野生動物の足跡を追いつづけるものは、森の知識に精通するだけでなく、同時に、つぎのことをいっそうよく知るようになる。

野生動物は日々の生活について終りのない原稿を書き

つづけている…。』⁴⁾

人が付ける痕跡も全く同じであるといえる。というよりも、この擬人化は人間にこそびったりである。^{* 12} 違いがあるとすれば、人は(たぶん無意識にであろう)自ら付けた痕跡について反省しうる機会を持ち、周囲の環境に楔を打ち込み、自らあるいは他人の行為のあり方を変化させることができる、ということであろう。願わくばその楔がよきデザインであることを望むばかりである。

先達の話のあるところに感銘を受け、必死にノートに走り書きする熱心な学生は、単に聞き流されることに筆を差し、痕跡として残したメモを将来それに気づくときがあれば再利用するであろう。走り書きの痕跡はその準備となる。痕跡のすべてが首尾よく利用されるわけでは毛頭ないが、気づかれた痕跡はかくも貴重な情報であることには一考の価値がある。痕跡学が世に知られることが、この価値をさらに多くの人たちに共有されんことを期待して止まない。

謝辞

本稿をまとめるに際し、大阪大学大学院経済学研究科の宮井康宏氏、富山大学芸術文化学部の小松裕子氏に貴重なご意見をいただきましたことを感謝申し上げます。

またこの研究は、平成23年度科学研究費補助金(課題番号:2230021)の助成をうけて実施したものです。

注釈

- * 1 故事ことわざ「外見より中身」、「人は見た目よりただ心」などがある。
- * 2 進化を研究している J.A. コインによれば、「痕跡器官」のように、「動物や植物の体内には、その祖先を示す手がかり、進化を立証する手がかりが隠されている」という。4.4 で述べる。
- * 3 スキナーによれば、『二千五百年以上にもわたって精神生活には強い注意が払われてきたが、人間行動を単なる副産物以上のものとして研究しようとする努力がなされたのはほん最近になってからなのである』と揶揄している。⁵⁾
- * 4 <http://event.yomiuri.co.jp/2006/butsuzo/win/10.htm> を参照。
- * 5 M. トウルツィはシャーロック・ホームズを引用して、『一人の人間の行動は予測できないにしても、平均的な人間が何をするかということならば正確に言いあてられる』⁶⁾。
- * 6 <http://www.gettyimages.co.jp/detail/72386434> を参照。
- * 7 以下の題材は、2009年7月、NHK特集のエジプト発掘第一集、「ピラミッド、隠された回廊の謎」として放映され、一躍世間に広まった、フランス人建築家、ジャン・ピエール・ウーダン (Jean-Pierre Houdin) 氏によるピラミッド建築方法の新説から得た視聴情報に基づいている。よって話の信憑性をここで議論するつもりはない。ここで取り上げた理由は、ウーダン氏が、ピラミッド調査の過程で見つけた痕跡に大きな意味を見いだしたからである。
http://55096962.at.webry.info/200910/article_19.html も参照。
- * 8 H. ペトロスキは『失敗学』のなかで次のように述べている。
『世の中には、どんな些細な失敗をも、受け入れるどころか、容易には見過ごさない一群の人々がいる。実際、われわれの多くには成功としか見えないものが、この人々には失敗と見えるのだ。この人々とは、世界中の発明家、エンジニア、デザイナーたちで、世界の中の事物を通じて世界を改良しようとつねに試みている人々である。これら恐れを知らぬ意図的な先駆者たちにとっては、いかなる種類の失敗も、不満ではなくて好機なのである。かれらは、われわれが知っている事物を変えて、われわれが必要としているのかどうかさえ知らない事物にしてしまう。この人々は、販売、営業要員 --- かれら自身がある種のデザイナーだ --- と協力して、一度に一品ずつ世界を変える。こういう創造的な人々

に共通する最大の特徴は、この人々が失敗を見る見方である。この人々は、失敗は自分たちに新規にデザインし開発する過程を遂行する機会を与えてくれるだけでなく、新しく改良された何物かを構想して失敗の誘因を除去することを可能にしてくれるものでもあるのだ。』⁷⁾ われわれとしては、失敗は痕跡として残されとなれば、新たな改良に弾みがつくのではないかと考えたい。

* 9 たとえ一回きりの痕跡であっても、その痕跡をつけた行為はそれまでに何度もなされた行為ではないかと疑ってみるだけの価値がある。痕跡がそれまで繰り返し行われたであろう行為の跡であると仮定することは大切である。確かに一回きりの行為で付く痕跡の種類も多い。ただし、一回きりであってもそれが残されるのは、それが多数の同じような中での一回であったときではなからうか。新雪に残されるスキーのシュプールは、一回きりの痕跡ではあるが、その跡は、スキーヤーの現在の技倆を如実に物語っている。プロのスキーヤーは求められればいつでも同じような素晴らしい滑走跡を雪面に残せるから、プロと称せられる。熟練した板前の包丁さばきの跡は、たとえ一回きりの切り口跡であっても、いつものように素晴らしい切り口を披露できる。痕跡にはこうした同じような繰り返しが行われるという情報も含まれている。「見えないものが見える」にこの繰り返しという情報を含める必要がある。ある意味、ある人の熟練度、技倆が分かるということは見えないものが見えていることの証しではないだろうか。

* 10 河野によれば、『私たちは、アフォーダンスを知覚することによって行為を開始したり、続行したり、停止したり、変化させたりしている。したがって、行為のコントロールは、能動的に情報を探索することによってなされる。』⁸⁾

* 11 K. マルクスの資本論のなかに興味深い記述がある。『もし、労働過程にある生産手段が過去の労働の生産物としての性格を感じさせるとすれば、それはその欠陥のためである。切れないナイフや切れがちな糸などは、刃物屋の A とか蠟引工の E をまざまざと思い起こさせる。できのよい生産物では、その使用属性が過去の労働に媒介されていることは消え去っているのである。』⁹⁾

* 12 写真 17 および写真 18 は、プラハの某ホテルのレストランで撮ったものである。各テーブルには一人ひとりのスペースにこの紙が敷かれていて、この上に食事が配膳される。この紙に関して疑問に思ったのは、このホテルのマークが、この紙の奇妙な位

置に印刷されていたことである。一般的にはホテル名のロゴは、右下とか、あるいは左下などに控えめに印刷されているものが多いので、この位置に何か意味があるのではないかと推測したが、それ以上確信が持てなかった。

そこで、このレストランのウェーターのチーフと思われる年配の女性に、このロゴの位置についてその理由を尋ねた。すると、「チェコは民主化されて間もない国で、サービスという意識が成熟していない。さらに近隣諸国からきた素人のウェイトレス達に、お皿やコップの配置を教えるのはとても難しい。そこで、まずはじめに水をこの位置に置きなさい、と教える。するとそのグラスを起点にしてグラスから真下にスープ皿を、その横にパンの受け皿を置く・・・というようにして教えやすいのだ。」という答えであった。ホテル名のロゴの印刷位置にはこのような役割が担わされていたのである。



写真 17 印刷されたホテルのロゴマーク



写真 18 ロゴの位置とその上に置かれたグラス

* 13 再び M. トゥルツィを引用しよう。『ホームズによれば、人間の行為はすべて何らかの痕跡を残し、目のいい捜査官ならばそこから情報をひきだせるこ

とになる。物理的な痕跡によって¹⁰⁾ 目には見えない情報も得ることができる。各専門分野で何が細部であるのかがわかっていくことが熟練するということなのかもしれない。ホームズではその細部が、親指の爪、両手、耳、袖口、ズボンの膝、靴、眼鏡、時計や靴紐、香水、そして足跡だったりするのである。

引用文献

- 1) コイン J.A., 塩原通緒訳『進化のなぜを解明する』日経 BP 社, 2010. p.111 より引用
- 2) ギブソン J.J. 著, エドワード・リード & レベッカ・ジョーンズ編, 境敦史, 河野哲也訳, 『直接知覚論の根拠』勁草書房, 2004. p.323 より引用
- 3) 村松貞次郎『道具と手仕事』岩波書店, 1997. p.30 より引用
- 4) シートン E.T., 藤原英司訳『シートンの自然観察』どうぶつ社, 1980. p.191 より引用
- 5) スキナー B.F., 波多野進, 加藤秀俊訳『自由への挑戦』番長書房, 1972. p.18 より引用
- 6) エーコ U.& シービオク T.A. 編, 小池滋監訳『三人の記号 デュパン/ホームズ/パース』東京図書, 1990(U.Eco & T.A.Sebeok ed., The Sign of hree, Indiana UP, 1983). p.80 より引用
- 7) ペトروسキ H., 北村美都穂訳『失敗学: デザイン工学のパラドクス』青土社, 2007. p.77 より引用
- 8) 河野哲也『環境に拡がる心』勁草書房, 2005. p.215 より引用
- 9) マルクス = エンゲルス全集, 第 23 巻, 第 1 分冊, 大内兵衛・細川嘉六監訳, 大月書店, 1965. p.240 より引用
- 10) エーコ U.& シービオク T.A. 編, 小池滋監訳『三人の記号 デュパン/ホームズ/パース』東京図書, 1990(U. Eco & T.A.Sebeok ed., The Sign of Three, Indiana UP, 1983). p.92 より引用

参考文献

- 1) 佐々木正人, 『アフォーダンス入門: 知性はどこに生まれるか』講談社学術文庫, 2008.
- 2) 赤瀬川原平, 藤森照信, 南仲坊編『路上観察学入門』ちくま文庫, 1993.
- 3) 竹尾編『FILING: 混沌のマネージメント』株式会社宣伝会議, 2005. pp.18 写真 営みの堆積-6 (同出版社の了承を得たうえで複写したものである。)
- 4) 竹尾編『FILING: 混沌のマネージメント』株式会社宣伝会議, 2005. pp.19 写真 営みの堆積-8 (同出

版社の了承を得たうえで複写したものである。)

- 5) Gibson, J.J., 'The Information Available in Pictures', Leonardo, 4, 1971, pp. 27-35.
- 6) Johansson, G., von Hofsten, C., & Jansson, G., 'Event perception', Annual Review of Psychology, Vol.31, pp.27-63, 1980.
- 7) アンダーヒル P., 鈴木主税訳『なぜこの店で買ってしまふのか: ショッピングの科学』早川書房, 2001.
- 8) Suri, J.F., 'Thoughtless Acts?', Chronicle Books LLC, 2005.
- 9) Kelley, T., 'The Ten Faces of Innovation', Doubleday, 2005 (鈴木主税訳『イノベーションの達人』早川書房, 2006)